

マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創始しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

text: Max E. Ammann design: Dynamite Brothers Syndicate

東南アジアの馬術界の今

東

南アジア各国でオリンピックに初めて参加した国、同時にFEIの関わる国際大会に東南アジアから初めて参加したことも意味するわけだが——それはカンボジアだった。イソップ・ガンシーとペン・サインのふたりのカンボジアのライダーは1956年、ヨーロッパに到着していくつかの競技会に参加したあと、スウェーデンのストックホルムで開催されたオリンピックの馬術競技に出場したのだ。その20年後には内戦によりカンボジアはFEIから脱退した。同国がふたたびFEIのメンバーとなったのは2007年のことだ。

1956年の国際大会へのデビューのあと、ふたたび東南アジアの選手が国際的な馬術界に登場するまでに数十年の時を経なければならなかった。この間の動きとしては75年から83年に、この地域の5カ国がFEIのメンバーとなった。75年にインドネシア、フィリピン、シンガポールが、81年にマレーシアが、83年にはタイが名乗りを上げた。

82年に第9回のアジアゲームが開催され、この大会で馬術が初めて競技として認められた。それから12年を経て、ついに東南アジアの選手がメダルを手にする。タイのナタヤ・チャントラスミが広島大会の障害飛越競技で銅メダルを獲得したのだ。開催国の日本、そして韓国という強敵に伍した意味は大きい。

98年、第13回のアジアゲームがタイのバンコクで開かれ、主催国

のタイはファングウィッチ・アニルスIIデヴァ少佐を含むチームが総合馬術で優勝し、マレーシアのワン・ザレハ、シード・オマール、そして兄妹のカビル・アンバックとクザンドリア・ヌルの馬術チームが銀メダルに輝いたのだ。タイのアニルスIIデヴァ少佐、マレーシアのワン・ザレハとマレーシアの兄妹選手はそれぞれの自国において国際的な馬術界の橋渡し役として活動を進めていった。95年、96年には障害飛越のボルボワールドカップの東南アジアリーグの創設を目指し、クアラルンプール、バンコク、ジャカルタ、シンガポール、マニラでワールドカップのディレクターとの話し合いが行われた。アニルスIIデヴァ少佐がタイをまとめ、カビルとクザンドリアの父であり、クアラルンプールで会社勤めをしていたハジ・ファシル氏がマレーシアでこの活動を強力に推進した。その流れの中でハジ・ファシル氏はワールドカップ東南アジアリーグの初代の代表に就任することになる。97年に東南アジアリーグの最初の競技会が開催された。翌98年の同リーグで

チームの一員として銀メダルを得たワン・ザレハは8年後にクアラルンプールで開催されたワールドカップのファイナルにおいて、主催側の代表のひとりとして就任した。

馬術で抜きんではる マレーシア

東南アジアリーグの創設によって、タイ—マレーシア間をはじめとして馬の国外への輸送が自由になった。97年以前はいかなる馬も国境を越えることは認められず、アジアゲームや東南アジア大会でさえ主催国が提供する馬を使って競技会が行われていた。一方で、この新しいワールドカップが生まれたことによって、インドネシアやフィリピンのライダーは自国で開催されない限り、高額な費用をかけて馬を運ばなくてはならなくなった。そこで、マレーシアのハジ・ファシルや国際的な競技会に出場しているインドネシアのラフィク・ラディナルは飛行機による馬の運搬の負担を緩和するよう力をつくした。

東南アジアリーグ創設の当初



上:2010年、中国広州で開催されたアジア大会の馬場馬術で個人の銀メダルを獲得したマレーシアのヌル・ムハマド・クザンドリア。

下:同じく広州のアジア大会で馬場馬術個人銅メダルを獲得したクザンドリアの兄、ムハマド・カビル・ムハマド・ファシル。
©GAGOC/FEI

は、同地域のライダーとアメリカ、ヨーロッパのライダーが競い合った。98年に優勝したのが東南アジアに住むアメリカ人だった。その後2度の優勝経験を持つのがスウェーデン出身でタイに住むヘレナ・ガブリエルソンだ。ヘレナ・ガブリエルソンはワールドカップ・ファイナルへと駒を進め、その最終戦は母国スウェーデンのイエテボリで開催された。このスウェーデン国外に住む女性がスカンジナビアの競技場でファイナリストに名を連ねることをメディアはこぞって報道し、当時大きな話題になった。

92年から96年の間、ヨーロッパでも競技生活を送るフィリピンのライダー、デニス・コユアンコはバルセロナとアトランタの2つのオリンピックを経験した。これが56年から途絶えていた東南アジア出身者のオリンピック復活の合図となった。2000年には同じくフィリピンの女性ライダー、アントワネット・リヴィステが障害飛越でシドニー大会に出場し、04年にはタイのポングシリー・ブンリワンがアテネの総合馬術に出場



同、アジア大会の総合馬術団体表彰式で、左から銀メダルのタイ、金メダルの日本、銀メダルの中国。
© FEI

し51位の成績を残した。

06年、第28回のワールドカップ・ファイナルはクアラ Lumpur プールで開催された。この大会を組織したのはマレーシアに住むオーストラリア人のペーター・ウィントンとマレー人の妻、そして前述のワン・ザレハ。ワン・ザレハはテレビのパーソナリティとしても著名になっていた。07年には、さらにメジャーなCSIがクアラ Lumpur プールで開催され、多くのヨーロッパ選手を迎える。しかし馬術が盛んな国柄とは言えない同国では、このふたつの大会を頂点として、それ以降はスポンサー集めに苦勞し、大きな大会は開催されていない。

西欧と違い、障害飛越、馬場馬術、総合馬術といった馬術競技は国際的な競技会に熱心に通うような経済的な基盤のあるミドルクラスの一部のライダーが支えている。そして、国内の数少ない乗馬クラブは富裕層を対象にしている、というのが東南アジア各国の現実なのだ。

東南アジアから ふたたびオリンピックへ

今世紀のアジアや東南アジアの競技会ではマレーシアがメダルの獲得数で抜きんできている。2001年のクアラ Lumpur プールでの東南アジア大会ではファシル家の3人の子どもたちが金メダルを獲得した。障害飛越でクゼーとカビルを含むマレーシアチームが優勝し、弟のカビルは個人でも優勝した。馬場馬術でもカビルは姉の

クザンドリアの上位に立ち、さらに2つの金メダルを手にした。05年にもカビルは個人の金を保持したが、チームはフィリピンに優勝をさらわれた。総合では95年はシンガポールチーム、01年はタイチームがそれぞれ優勝した。

東南アジアの馬術界の発展においてシンガポールのナイ・ユエ・ホが果たした役割はとても大きい。彼は障害飛越の審判であり、いくつものワールドカップにも主催側のひとりとして関わってきたのだ。面白いのがブキツ・キアラ、3Q、セラングール、プトラというマレーシアの4大馬術競技場の周辺に20人のFEIの審判が集中して暮らしていることだ。東南アジアのワールドカップを創始した他の4人のメンバーはインドネシア、フィリピン、シンガポール、タイにそれぞれ1人ずつしかいない。

最後に、これまでにミャンマーとカンボジアでは馬術に関わる活動が公に報告されたことはなく、またヴェトナムとラオスは今だFEIに加入していない。

マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられる。そのかわら、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(AEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど、多大な貢献をしてきた。